

トウーラ、美しき琥珀

クワーレンは唸った。

「諦める」

蜘蛛がそう言って、クワーレンを突き飛ばした。

泣きながら立ち上がったクワーレンは、白い崖にいることに気づき、足がすくんだ。

「帰ろうよ！」

クワーレンが叫んだとたん、傍の木が、ざあああつと、壁のようにそそり立った。物々しい、灰色の壁。

遠くから声が聞こえる。呼ばれているような気もしたし、警告されているようにも思えた。

息が苦しい。

「僕は、もう違うんだよ！ 見習いになったんだ！」

言おうと思ったが、だれかが後ろから口を抑えてきた。

「諦める！ お前は嘘つきだ！ だれも信じはしなかっただろ」

蜘蛛だった。手を外そうともがくが、びくともしない。クワーレンは呻いた。

「嘘つきだ！ 嘘つきだ！」

とたん、目の前が真っ暗になった。

（助けて！）

ぐるぐると腹の中が掻き回される。吐き気が最高潮に達したとき、クワールレンは飛び起きた。

葉の村の宿だった。悪夢を見たのだ。クワールレンは、胸をなでおろした。けれど、心臓が痛かった。

「おこ」

明けきっていない群青の世界で、誰かに呼ばれた。

窓辺に立つ蜘蛛だ。

夢が終わっていない！？

「おい、見ろよ」

その一言で、クワールレンの頭は目覚めた。

蜘蛛ではない。あれは、イムサだ。帽子を被っていない、刈り上げられた赤茶の髪が、鈍く沈んで見えた。彼は、窓へ顎をしゃくった。

「早くしろって」

クワールレンは、動けなかった。どういう意味があるのか、警戒する。蜘蛛を思い出す。「見ろよ」蜘蛛はそう言って、木の幹を指さし、近づいたクワールレンの

額を、幹にぶつけたことがあるのだ。

けれど、イムサが荒々しく手招きをするので、クワーレンは仕方なく近づいた。つま先立ちになり、窓とイムサから離れて、外をのぞく。

その姿勢に、イムサは訝しんだ。

「なにしてるんだ？」

「……なにして、外を見てるんだよ」

「もっと近づけよ。……早くしろ。じゃないと、消えるぞ」

「消える!？」

イムサは、自分を消すつもりなんだ！クワーレンは逃れようとしたが、イムサに強引に腕を掴まれた。

「ほら、見ろって！」

クワーレンは殴られるのを覚悟して目をつむった。

だが、イムサは何もしてこなかった。クワーレンは目をゆっくり開けた。

イムサは庭を見ている。四角く囲まれた小さな庭。宿の敷地だ。その真ん中で、なにかがくるくる舞っていた。

風にいたずらに踊らされている、布切れだった。……いや、よく見るとその舞いは、意思を持って行われていた。

クワーレンは、目を見張った。あれは、生き物だ。

骨ばった腕を広げ、白いかぎ爪が朝日を反射した。回転し、頭巾が衝動ではだけ、油っ気のないばさばさの髪が現れる。その頭のとっぺんは、かわいそうに、剥げていた。

「……あれ、なに？」

クワールレンは、囁くように訊ねた。

「〈つむじ風〉」

イムサは答えた。

「風を起こす魔法動物。でも、木は倒せねえ。葉を舞い上がらせる、超弱いやつ

さ」

彼は鼻で笑った。可笑しさと愛しさが混じったその目に、クワールレンは、息が止まった。

〈つむじ風〉は、まだ踊っている。見ている者がいるとも知らず、無邪気にくるくると舞い続ける。

日が昇り、あたりが明るくなるにつれて、その姿は、光に溶けていくように、いなくなつた。

何事もなかったかのように、庭は静まり返っている。踊った痕跡もなく、ただ、ここで見ていた者がいるという事実だけが残されていく感覚は、なんだか妙な感じがした。

「消えたな」

イムサは言うのと、食堂へ降りて行った。

クワーレンは、彼の優しい目を思い出し、体が震えた。

起床したチャルーと共に、クワーレンは朝食を食べた。イムサはおらず、リリとエネーリス、それに不機嫌なマウリンが先に食事をしていた。マウリンは朝が嫌いなようだった。

その間に、ドナウト師が落ち着か投げに入ってきた。師は、早く食事を済ませようせつついた。食べたなら、宿の前に集合だと言い残し、また慌ただしく出て行った。

「あんなに急ぐくらいなら、もっと講義を短くしたらどうかしら」リリは皮肉に言った。

宿の前へ行くと、通りの向こうにイムサがいた。いつのまに食事を済ませたのだろう。

ドナウト師は、それから素早く、獣の村行きトリびんの鳥便へ乗った。

やがて、北部の森——原初の森の半ばにつくと、鳥便は着陸した。薬の村から獣の村までは距離があるので、ここの簡易エテリセ玄関口で乗り継ぎをするのだ。これは、

ドナウト師ではなく、鳥便とりびんの中に張られた空路図で知った。

チャルーがげえげえしている間、ドナウト師はポウを買ってきて、それが昼食になった。

弱るチャルーを見て、リリとエネーリスが、出発をのばしたほうがいいと、ドナウト師にすすめた。

だが、師は、首を縦に振らなかった。

「今日中に着かねばいけないのだ。泊まるには適してないし、近すぎるからな」

「え、なにがですか？」

チャルーの背中をさすっていたクワーレンは、思わず訊ねた。

「え？ ……ああ、木だよ。木が多すぎるからだ。木が多くある場所は、魔法動物が多くいると言うだろう」

「でも、チャルーが……」とエネーリス。

「ああ、少し休んでからにしよう。次の鳥便とりびんで出発だ」

ドナウト師は容赦なかった。そのぼつてりと垂れさがった瞼の下で、瞳はせわしなくあたりを窺っていた。

「ねえ！ 見て！ あそこにナクーが描いてある〜！」

駅舎を走り回っていたマウリンが、天井を指さしながら駆けてきた。

見上げると、生きものの彫刻が広がっていた。山犬、蛙、鳥、蛇、鼠、おこじ

よ、猿、魚……そして、竜に、ナクー。ナクーというのは、猫のような頭に、犬の体をしている、エイナーの獣の中で、竜の次にかっこ強い獣だった。

「竜やナクーには、会えますか？」エナーリスが、期待を込めてドナウト師に問うた。

明後日の方を見ていたドナウト師は、「え？ああ、わからん」と軽く応えた。

どうも心ここにあらずな様子に、クワーレンは首を傾げた。

昼過ぎ、獣の村に着くと、マウリンは叫んだ。

「竜！ 竜に会えるっ!!」

「竜なんか見に行かん」言ったのは、ドナウト師だった。「中心部の広場に行かなくては。さあ、早くしなさい」

中心部へ向かう道には、大きな木造の家が並んでいた。敷地内には、馬小屋や鳥小屋、猿小屋なんでもものも建っている。

「さて、ここ、獣の村は、……ふう、……生き物とアベドたちが、深く共存しているところであって……」

ドナウト師が突然、ぶつぶつと講義をはじめた。みんなは、慌てて耳を傾けた。

「獣の人は〈獣〉を主として、いる。紋章は、うーん……山犬の顔を模っただ……。初代獣の長はだな、この多種多様な地形の場所を、生き物の住みやすい場所として考え……また……長の会の一致により、ここに獣の村を、作ったわけ

で……ふう……。だから、ここには、こうして……川、湖、山……あつちには、森。で、向こうには、砂浜、まあ、浜辺というものがあって……海もあり、非常に、生き物にとつては……まあ、いろんな生き物が、ここで育てられるわけだからな……えー、だから……とても、理想的な……場所であるわけで……」

なかなか聞いていてしんどくなる講義だ。クワーレンは、気持ち半分で聞いていた。さもなければ、白目を剥いて倒れてしまう。

猿や鳥の鳴き声、エイネー馬の鼻息が、そここで聞こえる。風向きが変わると、ふんわり、藁や糞や、獣の汗のにおいがした。そんな中で、ドナウト師のそばそ声を聞き続けるのは、たいへんだった。

ぼうつとしていると、指笛が吹き鳴らされ、見習いたちは、飛び上がった。

右の垣根の向こうで、なにか大きなものが動いている。

クワーレンは、ぎよつとした。

（蛇だっ！）

アベドの胴ほどもある蛇が、身をくねらせていた。青緑色のまだらが体全体に入っているその蛇は、まるで動く木陰のようだ。それは、デイゴンネー産の、と呼ばれる大蛇だった。

そして、その大蛇の前には、一人のアベドがいた。

食われるっ！　と思った刹那、アベドがなにかを地面に放った。

鳥の死骸だ。嵐トウリン・ハ・ナレエンの幹は、流れるように一飲みした。

「うぎゃあ……。おえ、生々しい」

ともに見ていたチャルーは、顔をしかめた。

「ちえ。竜かと思ったのにい！」マウリンは、口をとがらした。

「早くしなさいっ」

ドナウト師が怒鳴った。彼らは、慌てて後を追った。

「この先は、中心部の、第一広場に繋がっていて……」

ドナウト師はだるそうに話しながら、坂を下った。すると、六角錐をした木の建物が現われた。

「わ！ あれ、なに!? 竜がいるところ!?」

ドナウト師は、しつこいマウリンに、やれやれと首を振った。

「違う。あれは、村の管理塔だ。村の情報機関……。かつ、長の館だ」

広場に出ると、アベドが集まっていた。

真ん中に、毛皮の外套を羽織った大男がいる。その傍らに、なんと、美しい橙色をしたナクーがいた。けた外れに大きく、背丈が男の腹あたりまであり、肩幅も広い。

「おお、すっげえな、あれ」チャルーは、感嘆の吐息を漏らした。

「ねねね、あのアベド、だれ?!」マウリンは二つに縛った髪を、ぎゅうつと掴ん

だ。「ああああ、ナクーかっこいい！ 動いてる、生きてるよ！ ……………あつ、
まずいまずいっ！」

彼女は、さつとりりの陰に隠れた。

「ちょ、なに!？」

「ナクーがこっち見てるっ…………！」

大きなナクーは、その琥珀色の瞳で、じっと見習いたちを見ていた。
襲われるかも、という思いが、一瞬あたりに駆け巡った。

「やれ、騒ぐな。まったく…………！」

ドナウト師は、マウリンを叱った。「獣が動き回るここじゃ、なにが起きるか
わからんのだぞ。静かにしている」

「…………はい」マウリンは、しゅんと、うなだれた。

「では、広場を一周して、講義を終えたら、宿に向かうとしよう。…………ええと、
どこまで話したかな」ドナウト師は、見習いたちを見た。

「あの、獣の人と狩りの人の、共同労働の話だったと思います」エネーリスが言
った。

クワーレンは、ぎよつとした。そんな話になっていたなんて、知らなかった。
彼は、見習い帽子をかぶり直した。

「そうだったな。…………ええー、獣の人は、獣を自らの手で育て、生涯のほとんど

を、その獣と過ごすが、えー、労働時もしかりで、デイゴンネーへ狩りへ行く狩りの人の護衛も……」

だが、ドナウト師は気づいた。見習いたちがさっぱり聞いておらず、ナクーと毛皮の男に夢中になっていることを。

「あれは、長だ。獣の長、シュグレーデン。さ、もうわかったら、集中しなさい」

「長!? めっちゃ偉いアベドじゃん! ねえ、挨拶しにいつてもいい?!」マウリンが言った。

「いまはだめだ。講義が終わってからにしなさい」

「えー、行っちゃうよ! お願い、お願い! 近くでナクーを見るだけ!」

「だめだ」

すると、後ろで声がした。「やあ! ようこそ、獣の村へ」

ぎよっとして振り返ると、なんと、シュグレーデン長とナクーがいた。「邪魔しましたかな?」

「……いいえ」

雄々しいシュグレーデン長を前に、ドナウト師は、身を小さくした。

シュグレーデン長は、こめかみの髪を編み、顎髭を生やした、気品ある大男だった。朗々たる低い声が魅力的だ。

挨拶と名乗りを互いに済ませると、シュグレーデン長は、最後にナクーを紹介

した。

「彼女は、トウーラ。私の生涯の相棒だ」

トウーラは、琥珀色の目を、じっくり見習いに向けた。

「トウーラ（美しい琥珀）って、ぴったりですね」エネーリスが褒めた。

「そうだろう！」シュグレーデン長は、肩を震わせて喜んだ。

「ここは騒がしい村だが、ゆっくりしていってくれ。他では見られない獣が、うじゃうじゃいるからな。君たちの中で、いつか獣の人になった者がいたら、そのときは、このシュグレーデンが、じきじきに挨拶しに行くよ。そのときまで、俺が長でいたとしたら、の話だになっ！ ははっ！」

シュグレーデン長は、突如現れた太陽のようだった。彼の笑いに、こちらも釣られて笑った。

その時、突然ナクーが、クワーレンに近づいた。みんなは飛びのき、クワーレンは凍りついた。渦巻く虹彩が、クワーレンを捉えた。

「おいおい、積極的だな」

シュグレーデン長は、口の中で、ナカ、ナカ、と聞こえる変な音を出し、トウーラを引き下がらせた。

「ここしばらく、見習いと遊んでいなかったからな。どうだろう、触ってみるか？」

「本当?!」

マウリンが目を輝かせた。

「ああ。ゆっくり鼻先に手を近づけてごらん。匂いを嗅がせて。そうそう、焦ってはいけない」

トウーラは、ゆっくりマウリンの手を嗅ぐと、額をわずかに寄せた。

「おお! 気に入ったってよ!」

「やった!」

「次、俺っ! 次、俺っ!」

チャルーは言ったが、その前にトウーラが再び動き出した。ナカ、ナカと鳴いて、またクワーレンに突撃しようとしたのだ。

「こらこら、トウーラ」

すると、巨大なナクーは、噛みつかんばかりに、クワーレンの腹に触れた。犬歯を感じたクワーレンは、叫ぶこともできずに後ろへ倒れた。

「トウーラ! やめろ!」

シュグレーデン長は、ナカ、ナカと鳴き、むりやり彼女を引き戻した。

「すまん、大丈夫か?」

長の手を取り、クワーレンは立ち上がった。

「へへへ、平気です」

見習い服についたよだれを払ったが、手ががたがた震えてうまくいかなかった。

「遊んでくれると思ったのだろう。なんたって、最近は気の滅入る話ばかりで…」

「シユグレーデン長殿、我々はそろそろ……。実をいうと、ここで泊まらせていただこうと思ひましてな」

ドナウト師が、割り込むように言った。「いい宿は、ありますか」

「え、ええ」長は、右手を指した。「あそこの東鼠小道の左手に『尾っぽの宿』というのがあります。そこが一番、見習いの受け入れがいいでしょう。……美味しいルードルの照り焼きも出ますしね」

最後は見習いたちに向けて、長は言った。

「じゃあ、これでお暇させていただきます。どうもさようなら」

ドナウト師は、さっさとその場を後にした。そのとき、誰かが長に声をかけた。

「自然の村では、なにが起こっているんですか」

イムサだ。全員、ぎよっとして、無口だった少年を見つめた。

「自然の村？ ……ああ、〈見えない死〉のことか」

「〈見えない死〉？」聞いたことのない名前に、見習いたちは首を傾げた。

「ああ。新種の呪いなのだ。なんでも、作物や畑をだめにしてしまうらしい。近

づいたものは、悪寒や吐き気に襲われると。……自然の村には行かなかったのかい？」

「ええ、ええ、行きましたよ。ですが、そこには近づかないようにしたのですよ」
ドナウト師がかぶせるように言った。「なにがあるか、わかったものではありませんからね」

「ええ、そうですね。賢明な判断ですな」

シュグレーデン長おまが言い終わらぬうちに、ドナウト師は「それじゃ」と言って、見習いたちを急かし、宿へ向かった。

だが、少年たちは、気が乗らず、そこに佇んだ。

「あまり師を煩わせるなよ？」長おまが優しく言った。

「煩わせてはいません」イムサが呟いた。

「イムサ、君は、いくらか師に不満を抱いているようだが？ それか、なにか不安なことでもあるのか」

「いやあ、こう言っちゃなんですけど、ドナウト師は、ためがながいんですよ！」

そう言ったのは、チャルーだった。「絶対、シュグレーデン長おまのほうが、講義、うまいと思います！」

「はっは！ なにを言う、私は獣の人だ。君たちには教えられん。……いいや、待てよ。お座りなら教えられるな！」

長とチャルーは、そこで大笑いした。

「だが、こう思われては、師も悲しかろう。彼も頑張っているのだ。もちろん君たちもだが、彼の講義だけで、彼を判断するのは早急な気がするな」

「いいや、違うんです」

イムサがぼそつと言った。それは、ドナウト師が東鼠小道ホラーキから呼ぶ声によって、かき消された。

「じゃあな。講義、頑張れよ」

シユグレーデン長おまは言い、彼らは別れを告げた。クワーレンは、トウーラがつまでもこつちを見るおかげで、身ぐるみ全部剥がされたような気になっていた。たので、ほっとした。

『尾っぼの宿』に入るなり、ドナウト師は部屋に引っ込み、見習いたちは食堂で夕飯を食べた。

食堂では、猿の玉乗り芸を見ることができた。獣の人が、抑揚をつけて歌いながら、猿と共に陽気に踊る。

「あのおさるさん、すごくかわいい」

エネーリスが、ルードルの照り焼きそっちの気で言った。照り焼きは、長おまの言った通り、たれが濃厚ですごくおいしかった。

「エネーリス、ルードルもらっていい？」マウリンが横から匙を突き出した。

「ちょっと！ 後で食べるの！」

「いいや、ぜったい青だぜ」

そう言ったのは、向かいに座るチャルーだった。

「いいや、赤だよ。……ほらっ、いま、飛んだ！ 見てたチャルー？ 赤だったよ」

クワーレンは、猿を指さして言った。

チャルーは、ちょうど皿にかぶさって、ルードルを噛みちぎっていたところだったので、

「見てなかった！」と叫んだ。「でも、あの種類の猿は尻が青いって……どっかで聞…」

「あのさあ、食べてるのよ。猿のお尻の話はやめて」

リリは、じろっと少年たちを睨んだ。

「けど、そういう芸なんだぜ!？」とチャルー。

「そこに注目して話さないで、って意味」

「けど、見えちゃってんだから、しょうがないだろ」

それを聞いたマウリンはげらげら笑い、リリは呆れたが、エネーリスまでもこっさり笑うので、「ちょっと!？」と仰天した。

そのときだった。宿へ防風眼鏡をつけた男が入って来たのは。そのアベドは、

装具を頭に跳ねあげると、勘定台の向こうへ言った。

「馬肉をひと塊。あと、ルードルをふた塊。すぐに頼む！」

やってきた主人は、「もっと丁寧に頼めねえのか」と言っ、奥へ引っ込んだ。

「早くしてくれ！ じゃないと……、ここが焼け飛んじまう！」

その瞬間、耳をつんざく咆哮が宿を震わせた。

ルードルの照り焼きを食べていたクワーレンは、肉を詰まらせかけた。

「なに!？」少女たちが叫ぶ。

あちこちで食器の落ちる音が響き、悲鳴と笑い声が起こった。だけれが、「おい、ちゃんと、手なづけとけよ！」と叫ぶ。

クワーレンは、詰まりかけた胸を叩きながら、もしやと思った。「……竜？」

マウリンは狂喜の叫びをあげた。「竜!？」

とたん、それに応えるように、再び大音声が響いた。目玉が飛び出しそうになり、内臓も肌も髪の毛も、全部が細かく振動した。みんなは、ぐっと、耳と目を閉じた。

「おめえのはどうにかなんないのか！」戻って来た主人が怒鳴った。

「どうしようもないんです！ あれが彼女なんです！」

「口、縛っとけ！ 口！」

代金を払い、獣の人は慌てて出て行った。客たちは、膝を叩いて笑った。

マウリン、クワーレン、そしてチャルーは、急いで窓へ行き、外を覗いた。街灯に照らされた馬小屋の上に、空へと向かって曲がる、ぎざぎざの太い柱があった。

クワーレンは、息をのんだ。その曲がった柱が、上下に動いていたのだ！

(竜の首だ！)

すると、なにかが転がされる音がし、次いで咀嚼音がした。

「お肉、食べてるよ！」マウリンが小声で言った。

そのとき、雷鳴がとどろいた。と思いきや、下から上へ、ざあっと、橙色に輝く柱が現れた。あまりの明るさに、あたりは昼のようになった。

クワーレンは、目を見開いた。

竜の喉が、光っていた。

とたん、世界が真っ赤になった。熱と轟音が波のように襲ってきて、クワーレンたちは急いで窓から離れた。

「ばっかやろう！ 店を燃やすつもりか！」

炎がおさまると、主人が喚いて出て行った。

「すまねえ！ すぐ行くから！」

「早く出ていけっ！」

食堂の中は、この寸劇を笑う声で満ち満ちた。玉乗りの猿は、さらに踊りを滑

稽なものにし、曲調は速まった。

その猿が飛び上がった時、床に伸びていたクワールレンは勝利の声を上げ、チャルーは叫んだ。

「ちくちよう！ 赤かよ！」

それに客たちは、いつそう笑い転げた。クワールレンは涙が出るほど笑った。

眠りたくはなかった。

ずっと脳裏に、あの立派な竜の首が浮かんでいる。燃え盛る宿の庭、ひっしに布で消そうとする主人の姿。そんな彼の努力は爪の先にも満たないと言わんばかりに、荒々しく打ち下ろされる竜のひと羽ばたき。火の粉は一瞬で消し飛び、重厚な竜の肉体が、空を蹴って消えていく。その一部始終が、クワールレンを眠れなくさせていた。

それに、クワールレンは思う。これを考えると苦い思いになるが、眠れない理由は他にもあった。

あの悪夢だ。

アバルバン谷でのこと。それは、忘れ去られたところに、突如としてくる。

クワールレンは、また置いてきていないものを見つけてしまった、と思った。

蜘蛛とアバルバン谷。

これは、見習いになったら消えるものだと思っていたのに、どうやらそうではなさそうだった。新しい自分になれそうなのに、今日は涙が出るほど笑ったのに、眠るとなると、とたんにやつらはやってくる。

いったい、自分はもうどうしたらいい。こんないい方向に向かっているのに。なぜ涙がこぼれるの？

泣いている間に、ペニヤツツ酒や、とりびん鳥便、ドナウト師、竜が浮かんだ。最後は、トウーラがこっちをじっと見てきた。

彼女の目の奥に、逃れられない者たちがいた。蜘蛛、その目の奥に、やつらがいた。

眠りのアベド。

彼らは、真っ白い崖の上で、ふわっと振り返った。とたん、世界が闇に包まれた。叫ぼうが、あがこうが、なにもない。

一人ぼっちだ。

何者かの声がする。クワーレンは、耳を塞いだ。ざらざらざらざらざらざら。知らない言葉。けれど、消してやろうとする意志が、はっきりと伝わってきた。

クワーレンは、悲鳴を上げた。どろどろと、胃の底から吐き気がこみ上げる。

「ピ克蘭タ！ ピ克蘭タ！」

はっと目を開けると、まだ夜は明けていなかった。

長い長い夜に、クワールレンは深いため息をついた。